

デカタン及び耽溺とは何ぞ此不健全なる思潮に對する覺悟：論説

著者	戸澤， 姑射
雑誌名	龍南會雜誌
巻	131
ページ	12-22
発行年	1909-06-20
その他の言語のタイトル	デカタン及び耽溺とは何ぞ此不健全なる思潮に對する覺悟：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/5742

結合して、扇を鏡に變ずると共に、大に國民的として、謠曲にまで採用せられるに至つたものだと信ずる。かくて、謠曲も狂言も、其内容に何等の類似がないにも拘らず、共に越後の松の山家に就いて語らるゝ所以は、恐く同地に、鏡を珍しがつたといふ古説があつて、それが有名となつた故だらうと推測する外、目下予には定説がない。

(完)

デカタン及び耽溺とは何ぞ此不健

全なる思潮に對する覺悟

戸澤 姑射

これは全体此雜誌へ載せる積りで草したものではない、在熊本基督教の牧師諸氏が催しつゝある讀書會の席で、何か文學に關する談話をせよとの依頼で、乃ち表題の通り目下文壇の一隅に折々聞かると、デカタン及び耽溺といふ語の意義を自己流に解釋して見たもので決して立派な研究でもなければ又意見でもない、只だ如何なる風にしてかういふ思潮が起つて來たか其由來を尋ねて見たものに過ぎぬ。それも極めて通俗的に概括的に尋ねて見たものに過ぎぬ。然るに雜誌部委員の太田君から、それを雜誌に載せて呉れとの相談で、實は御斷り致さうと思つたのであるが、更に考へて見れば、此の如き思潮其物の不健全なることは勿論の事實としても、此語の意義を知りたいと思はるゝ諸子の爲めには、幾分の助けとなるかも知れぬ、且つ此不健全なる思潮に對する覺悟等に就て、少々愚見もあること故、序にそれを話し致すも強ち無用の業ではあるまいと思ひ直

して、こゝに貴重の紙面を汚すことゝした次第である。

さてデカタン及び耽溺といふ語を尋ぬる順序として、吾人は先づ此等の語を生み出した所謂近代文學なるものゝ意義を闡明せねばならぬ、又近代文學の意義を闡明する順序としては、八釜しく云うと、クラツシツク文學、ワーマンチツク文學の身元調べから始めねばならぬ譯であるが、私はさういふ面倒な見方をせずに、文學史上の區別などを撤してしまつて、古へからの文藝といふものを、ぐつと大ざつばに一睨みに睨んで見る、さうすると、要するに文學と云ふものはいつの世でも、人生といふ本流に伴うた傍流に過ぎぬといふ事になる。但し傍流といふものは必ずしも本流と同方向には流れぬ、本流は東に向つて流るゝ時、傍流は却つて西に向つて流るゝの奇觀を生ずることもある、即ち逆流する場合もある、併し如何に逆流しても其原因は本流にあるといふ事を忘れてはならぬ。實際の川に於ても往々見る處であるが、本流混濁して水勢猛烈なる時若くは本流の屈曲せんとする時、若くは川底の淺瀬より深淵に移らむとする時など、傍流は動もすれば逆流、渦流などの奇觀を生じがちである。文藝に於ても其通りであるから、一寸見た處では某の時代に某の文藝あるは解す可からざるやうに見ゆる事もあらうが、精しく尋ねて見ると屹度其原因は當時の人生といふ本流の中にあるに相違ない。要するに文藝といふ傍流は概して人生といふ本流に基くことは古來然りである。併しかういふと屹度諸君の中には次のやうな疑を起さるゝ人がある、即ち昔の文學は遡れば遡る程人生とは懸け離れて居る、いくら傍流は本流と方向を異にする特殊な場合があるとしても餘り、人生と

懸け離れ過ぎて居るのではないかと。さういふ人の爲めに、私はこゝで一つ人生と云ふものゝ時代に依つて大に意義を異にして居ることを辯じて見たいと思ふ。

二

人生といふと餘り漠然としては居る、之を劃然たらしむる爲めに、吾人も生活といふ語を用ふる。さて生活といふのを更に考察すると、生活は物質生活精神生活の二者より成ることを容易に觀取し得る。衣食住を初め總て物質に關する享受、努力は物質生活である。理智、想像、空想等の努力範圍は則ち精神生活である、或は前者を有形生活と稱し後者を無形生活と稱するも可からう、今の人の云ふ實生活といふ語は、或は前者を指す場合もあるやうだが概して云ふと、二者を合せたる生活其者を指す様である、即ち矢張り人生といふ漠然たる語を劃然たらしむる爲めに、實生活と呼んだものであるらしい。

さて昔の生活と今の生活を比較して見る、先づ昔の生活には精神生活が著しく多い、殊に想像や空想を働かす餘地が多かつた、物質生活は比較的容易であつたと同時に、今から見ると著しく限られてあつた、幾何の富力を以てしても物質其物に限りがあり、又時には階級制度などがあつて、自ら自由に縦まに物質生活をなす事は出来なかつた、一口にいふと、昔の實質生活は多少束縛せられて居た、そこで自然の影響として昔の精神生活は、今よりもすつと自由で綽々たる餘裕があつた次第である。従つて文藝にも影響して空想的架空的の分子が多かつた、併しこれは決して實生活と懸け離れて居ると云ふ事は出来ぬ、空想的架空的なのが、昔の實生活であつたのであるから。それが

近世に入るに従ひ、物質生活は豊富充實多岐多様且つ自由になつて來た。同時に人は物質生活に關する享得努力に忙がしく所謂生存競争は激しくなり、中に精神生活を顧るに餘裕がなくなり、文藝も之に伴うて變つて來たのは誠に當然の次第である。之を一個人の生活に見るも年齢に依つて正さに此通りの變化がある。親の脛を噛る時代は物質生活に束縛のある時代である、此時代には精神生活を縦にする。空理空想は盛に活動する、それが親の脛にも離れ、自ら物質生活を營むやうになる。精神生活は直ちに萎微振はざる有様となる。二十才の詩人は大抵三十才の俗物である。

三

試に今の生活の内容を調べて見れば、之を昔日に比して非常な増大であるが、殊に物質生活に於て然りである、例へば蒸汽電氣汽車汽船等の發明と共に、衣食住の豊富になつたことは驚くばかり、飲料食料悉く世界中の美味を集め被服化粧品などに至つても、昔の人の夢想だもせざるものばかり、男兒が香水をつけたり、チツクを塗つたりする始末、かく物質生活が豊富になると同時に、精神生活は其時間に於て餘裕がなくなつたが、其分量に於ては、是亦著く増大し、昔は無かつた科學といふものが先づ人心に大變動を起し、宗教哲學の數も殖る、自由民權の思想、やれ個人主義やれ社會主義といふやうに澤山な材料が出来た、一言に云うと精神生活も豊富になつた、併し此方は分量に於ては増加したが、時間に於ては精神生活を營むべき時間に於て餘裕が減少した。

之と同時に物質生活と精神生活との關係が大に變化して、昔は兩生活各獨立して居るかの如き觀のあつたのであるが、今は二者の關係が甚だ接近して來た併し調和したのではない、何う接近して來

たかといふと、精神は物質の奴隷であるかの如き觀を呈して來たのである、我々が精神を勞する處には、大抵其裏面に物質が控へて居るといふやうになつて來た、學問も主義も物質生活の補助機關であるかの如く思はるゝに至つた、道を説く者でさへが、一演説五十圓の百圓のといふ演説料を要求する時代となつた。詩を作り歌を詠むも報酬の觀念が其裏には潜んで居るやうになつた。これはたしかに大なる變化である。昔から人間が空中を鳥の如く飛ぶ事が出來たならばといふ考へがあつた、そして飛行の道具を計畫したものは世界中に折々あつたやうだ、併し昔の人の計畫と今の飛行器の計營者との間には大なる差がある、昔の人の計營は空想を満足せざる爲めだ、今の人の計營は實質生活に資する爲めである。

兎に角兩生活は接近して來た、實生活は所謂切實となつた、餘裕なくなつた、昔は精神を遊ばせるといつたが、今は精神を役務するといふ状態になつた、此大變化が人間の氣質體質に大影響なくして濟まうか、果然人間は概して弱くなつた神經質となつた感情氣分などが馬鹿に鋭くなつた、同時に始終何人の面にも疲勞の色が見ゆるやうになつた。文藝は一轉せざる可からざる時機に遭遇した。

四

併し物には形式といふものがある、而して形式といふものは其性質上保守的のものである、成るべく舊形式を保存せんと力むる、縦令實質は空となつても形式だけは何時迄も残らむとする。人生即ち吾人の生活を支配統一する所の形式即ち宗教道徳習慣等も、實は實質と共に變すべくして、而かも容易に變すること能はざるは今日の状態である。文藝にも同様に形式がある、生活と共に文藝の實

質も變化したにも拘らず、其形式は粘着力と彈力とに富んで居る。但し形式といふものも、之を解剖して見ると二つになる。一は外形の形式一は内容の形式である。外形の形式とは則ち文体スタイルである、内容の形式とは觀察の仕方、考へ方、事物に對する態度等である。此内外兩形式の様々の結合錯綜が一口に云ふと形式なるものである。而して形式なるものは、前に云つた通り保守的のものである。それだけ新進氣鋭の士は昔から形式を打破するに力めて様々の悲劇喜劇を演ずるが、世の中の新舊思想が結局常に調和されて行くも、一に此形式の保守的なる性質に基するものであらう。

文藝の上にも矢張り新進氣鋭の士はある、同時に多數の雷同者がある、此等が舊形式を打破せんと力むるは云ふ迄もない、是に於て今の文藝は大別して二となる、一は舊形式に依りて世態人情を寫さむとする者、一は新形式を以てせんとするもの、これである併しこれは概括したもので、勿論其中間に色々様々の變種があるのは云ふ迄もない。さて新形式を以て寫さむとする者の、第一に努力する所は、先づ舊形式の打破である、何とあれは新形式は未だ未定の形式であるから、何でも舊形式を打破しなへすれば、新形式は自から顯れやうといふ意氣込であるらしい、従つて此派は何でも破壊的で、従來の形式といふ形式に對して悉く疑を懷く。而して此派の文藝を稱して誰云ひ初むることもなしに近代文藝といふ形式に至つた。斷つて置くが、これも文學史的に系統を尋ねて來ると、中々面倒な複雑な關係はあるやうだ、併し細かい枝葉を切り棄て、根幹のみを辿つて尋ねると、正さに此様なものが近藝文藝あるのだ。

故に近代文藝の特色は破壊的なると同時に、未だ新形式新標準のない爲め懷疑的で反抗的であまけに悲觀的自暴自棄的ある所が不の見ゆる、此派は舊形式の打破を力むと云つたが、形式の中でも殊に前述の内容的形式の打破に重きを置く、即ち人生の觀察の仕方考へ方等に就て舊來の方法を排斥する、即ち第一にコンヴェンションといふことを排斥する而してコンヴェンションは從來の宗教道德が教ふる所に由ることが尤も多いから、舊來の宗教道德を今の人生に不必要否を寧ろ有害なりとまで云つて攻撃する、而して新宗教新道德を、出來得べくんば建設せんと望む、此處に至ると彼等は文藝の士であると同時に一種の倫理學者社會經營者の精神を有する、而して此点だけは慥かに近代文藝家の偉大なる所以である勿論其説の當否は別として——此頃持離されるメテリンクなどは此部に入れらるべき人であらうオスカア、ワイルドなどでも其概はある、併しながら宗教道德の改造などいふ事は一朝にして成るものでない、コンヴェンションの掃蕩なども同様であると同時に、動もすれば社會の有力者より迫害若くは少くとも排斥位は受ける、其處で所謂薄志弱行の徒である、忽ち悲憤慷慨する、次に自暴自棄となる。又一方に於て彼等は舊來のコンヴェンションや總ての舊形式十文藝上の舊形式のみならず、實社會の舊形式までも含む——を悲認しながら、只一つ古今を通じて變らざる人間の本性本能を認め、本性本能より發する慾望の満足は人情の自然なりといふ程の考を有するが故に、これか自暴自棄の精神状態を助けて、放縱なる生活に陥り、動もすれば酒色に沈面するの愚を演ずる、而して之を以て悶々の情を遣り不平を吐き悲憤慷慨當世に容れられ

すと稱する。此等の代表的人物は或は眞に然かあるのであらう。併しなから何事にもさうであるが、其末輩に至つては勿論それ程の精神も氣概もない。而して徒らに其口吻を摸し、口實を之に借り、以て放縱の生活を爲しつゝ、其作品にはコンヴェンションを排し、何物にも囚へられざる赤裸々の人生を描くと稱し、或は時代精神を描くと稱し、或は現代の面影を髣髴たらしむると稱して妄りに卑猥の圖を作る者か少なからずあるらしい。而して此等の徒を總稱して——代表的人物をも併せて——デカタンとは云ふのである。而してデカタンの放縱なる行爲を稱して耽溺とは云ふのである。

六

さればデカタンとは其結果に於ては從來の放蕩兒と異ならぬ、耽溺とは則ち放蕩其者にすぎぬ。併し其性質に於ては差異がある事は認めて遣らねばならぬ。所謂放蕩兒は當代の形式に反抗するの概もなければ宗教道德に對して何等の要求があるのでもないが、只だ自制克己の心に乏しく、父、兄に對し世人に對し、濟まぬくと思ひながらも、兒女の情に惹かれて遊冶淫逸に日を送るのであるが、デカサンは兎も角も幾分の學識デレストと趣味と鋭敏なる感覺とを有し、懷疑心反抗心に富み、其中の代表的人物に至つては、眞に革命家の氣概を有し、泪羅に投じた屈原位の精神を有すと稱せらるゝ、か自制克己の心に乏しきは所謂放蕩者に等しく、一は世に合はざるの不平をもらし殊更に世の舊形式に反抗して痛快を叫ばんが爲め、一は本能的慾望を満足せしめんか爲めに、放蕩兒の爲す所を爲すのである。かう考へて見ると今のデカタンは能く昔の戲作者に似た点がある、只だ昔の戲作者は自意識なく而して餘裕あるデカタンであり、今のデカタンは自意識ありて而して餘裕なき戲作者であ

るの差がある

所謂耽溺の所謂放蕩と異なる所は、以上の所説で大抵明瞭であるやうであるが、其重なる差は、放蕩には反抗なければ耽溺には反抗がある、従つて放蕩には折々良心の苛責があるが、耽溺には良心の苛責がない、縦令あつてもあるを耻辱と考へる、耽溺には沈痛の所があるが放蕩にはない。放蕩は止むを得ず妻子を顧みぬのであるが耽溺はわざと妻子を顧みない、其意は蓋し夫婦といふ舊形式に戦を挑むのである。併しこれは眞正の耽溺を云うたので耽溺にも膺物が多い、耽溺の假面を被つた放蕩が幾らもあるに相違ない

諸君私が見た所のデカタン及び耽溺とは此様なものである、私は十分同情を寄せて調べて見た積りである、私の考では此様なものを調べるには始めから頭ごなしにして考へては到底分らぬ、同情を寄せて考へねば眞相は捕へられぬと信するのである。世の中の老大家先生達は、大抵此頃の新思潮を初めから頭ごなしにして、けなして仕舞ふ、それ故に何時迄經つても新代の青年の思想が分らぬ、徒らに剛健の氣風を養へ、着實なれ、堅實なれと教ふる併しながら、吾人は何事に對して剛健の態度を取るべきか、何物に就て着實に堅實あるべきか、其對象を研究して示して呉れぬ、判然たる對象なしの警戒は取りも直さず對手を知らざるに喧嘩を勧めるやうなものではなからうか、敵の實力は何程、弱点は何處にあるといふことを知らさずに妄りに喧嘩を勧める、勧められた方では、それは敵は取るに足らぬ弱武者だらうと早合点して渡り合ふ、すると敵は案外に強い、忽ち逆まにやられて仕舞ふといふやうなのが、今日の老大家先生の青年に對する訓戒である場合が多いやうだ

是は飛んだ横道に外れたが、私の見たデカタン及び耽溺とはざつと此様なものである、これまで述べた所で大抵御了解であらうが、此文藝上の新思潮には大分同情すべき所があると同時に大なる欠点が残る、然らば同情すべき所とは何處で欠点とは何處であるか。

諸君、今日の青年程危険なる足場の上に立つて居るものはないのである、文藝の上に携はらざる者と雖も、前に述べた通りの生活状態にあるのである、そして文藝の上のみならず實社會の上にも、舊形式打破の運動、新形式新標準の未成に對する煩悶不平は人々の胸に潜むのである。換言すれば今の青年にして不知不識の間にデカタン思想に全く捕はれぬものが幾人あらう、只だ彼等の多數は耽溺なきデカタンであるばかりであるのである、私はかゝるデカタン思想に飽くまで同情する、而して不束なから訓戒の辭を呈する。外でもない、舊形式打破の運動に費す勞力を新形式建設の上に見せよといふのである。勿論新形式は容易に建設されるものでない、恐らく諸君の一代には成就の見込はあるまい、而して舊形式は諸君の身体に適合せぬといふ今日の場合、種々の懷疑煩悶の鬼に附け込まれ惱まざるゝは當然である、恐らく色々の悪魔の誘惑があらう併し其種々の鬼の攻撃色々の魔の誘惑を耐へ忍び、一心不乱に子孫の爲めの新建設に従事すること、則ち剛健の氣風の用る所ではあるまいか、着實も堅實も此の戰場にこそ用ふべき武器ではなからうか、
懷疑は致し方もない、反抗は耐へ得る、煩悶は同情を價する、併し自暴自棄は大に責めねばならぬ。吾人と雖も周圍の事情がしつくりと我が身に適合せぬ場合、或は價值なきもに我自由を拘束せらるゝ場合等には、随分酒でも飲むで反抗の態度を収り、痛飲淋漓など、自暴自棄的のもつげな慷慨

をして見たいやうな氣のするは、強ち思ひ遣りのないでもないが、要するにそれは薄志弱行といふものだ。

重ねて云ふか、諸君は破壊を後にして建設を先にせよ、新形式成るの旨には、舊形式は敢て打破せしめども、自然に消滅するではないか、意建設に専らなる間は決して鬼や魔に精神を乱さるゝ事はない。文藝の上と雖も一心不乱に新建設に従事しつゝある間は、デカタンや耽溺はない筈なのである。要するにデカタン思想は不健全の思想である、此不健全を治するには剛健着實が必要である、併し其剛健着實たるや、此不健全なる思想に同情した上の剛健着實でなければならぬ、デカタン思想を通り抜けた上の剛健着實でなければならぬと私は信するのである。

(完)

心虚則性現。不息心而求見性如撥波覓月。
意淨則心清。不了意而求明心如索鏡增塵。

(菜根譚)